

科学（知）と思い込み（無知） ——トランプを大統領にしたもの——

なぜ、トランプが大統領に？

自由と民主主義の先進国を自認し、また、他国からもそう思われてきた米国で、なぜ、トランプのような反民主主義的で反知性の人物が大統領に選ばれたのか、資料を読みデータを集め、ずっと考えている。思うに・・・原理主義的な（野蛮な）資本主義の暴走によって、民主主義が空疎な建前となり、社会の格差分断が進み、その結果、野蛮な資本主義の犠牲者が政治的反乱を起こしたのだ・・・しかし、その反乱が敵としたのは野蛮な資本主義ではなく、民主主義だった・・・米国の民衆はなぜ的（まと）をはずして敵を選んでしまったのか。

科学（知）と思い込み（無知）

科学^{（注1）}とは事実と観察^{（注2）}にもとづいて「A ならば B である」という法則を知ることである。これは、アリストテレスの言うところの「知」と同じである。それでも、あらゆる A について、B が成立するかどうかは、わからない。あらゆる A について検証するのは人間には不可能だからである。したがって、科学（知）は本質的に、これで絶対に正しい、ということではなく仮説であり、深いところに留保があり、その意味で謙虚である。そして、A ならば B である、に従わない事例が見つかれば、B は修正されさらに包括的な「A ならば C である」という法則が発見されるだろう。さらに C に従わない例が出現すれば新たな D が発見されるだろう。その意味で、科学（知）は本質的に、事実と観察、批判と検討によって発展し深化する。

アリストテレス

「知とは 単なる事実の記憶ではなく、
原因や原理を理解すること」

A→B から A→C の発展の例

A: 質量 (m) の物体が加速度 (a) で
直線運動しているならば

B: 物体に働いている力 (F) は
 $F = ma$ (ニュートン 1687年)

C: 運動速度 (v) が大きいときには
 $F = \gamma^3 ma$ (アインシュタイン 1905年)
ただし $\gamma = (1 - v^2/c^2)^{-1/2}$ c:光速

科学（知）が「事実によって検証され、また深化してゆく発展的な考え」とすれば、その反対は、知識の不足ではなく、「事実によって検証されることがない固定した思い込み」だろう。それは、無知であることを自覚しない無知（ignorance of ignorance）からくる確信であり、その確信は、証明する必要が無く、批判的な事実や観察があっても修正され発展することがないから、知よりも強い確信を生み出す。

ただし、科学（知）がいつも正しいわけではなく、「思い込み」がいつも間違っているわけではない。科学（知）も「思い込み」も、ともにその時代と歴史や文化や周囲の状況の「壁」の中に捉われている。要は、新たに知った事実や体験、他者との対話によって壁を越えることができるか、どうか、ということだ。科学はその本質からして壁を乗り越えるものであるが、「無知から来る確信」はそうではない。

なぜ今さらこんなことを言うかというと、社会的経済的な格差が拡大する米国で落ち込んだ人々の既成政治に対する拒否の感情が「無知からくる確信」によりトランプに流れ込んだ、と思うからである。

乱暴なハッター屋で気分屋で傲慢なトランプがなぜ大統領選に勝ち、共和党を完全に掌中に収め、支持層を強く引き付けているのだろうか。信頼できそうな（＝言説の根拠となる論文や資料の引用がしっかりしている、インタビューなら誰と何時どこで面談したか記載がある）いくつかの本を読んで考えた（以下出典は①-④で示す、吉田の調査は⑤）。

ソクラテス

「私は知恵ある者と言われているが、それは、自分が知らないということを自覚しているからにすぎない」

「だが、無知はしばしば知よりも確信を生む」

チャールズ・ダーウィン
進化論に反対する博物学者を評して

他人の考えや未知の情報が自分の理解枠に合わないときに、それを理解しようとせず遮断してしまう。その見えない壁こそが“バカの壁”である。

養老孟司 『バカの壁』(2003年)

- ① 「資本とイデオロギー」
T. ピケティ（訳）山形浩生、森本正史
2023年 みすず書房
- ② 「絶望死のアメリカ」
A. ケース、A. ディートン（訳）松本裕
2021年 みすず書房
- ③ 「それでもなぜトランプは支持されるのか」
会田弘継
2024年 東洋経済新報社
- ④ 「壁の向こうの住人たち」
A.R. ホックシールド（訳）布施由紀子
2018年 岩波書店

今の米国は、極端な格差社会

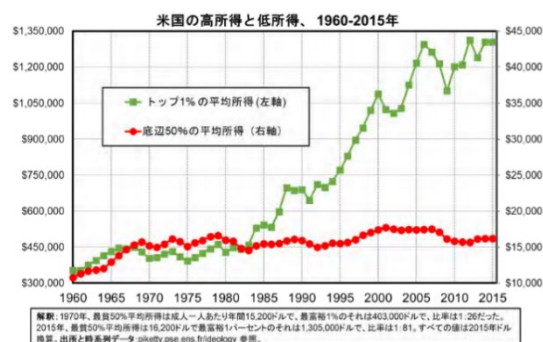
—— 中間層の没落 ——

米国は変わった。21 世紀の米国は、20 世紀の米国ではない。かつての世界一の経済大国は、世界一の格差大国になった。そして、トランプが現れた。

米国の 3 人の大富豪、J・ベゾス、B・ゲイツ、W・バフェットの資産の合計は、米国民の 50% を占める庶民の資産の合計とほぼ等しい^③。イーロン・マスクの資産は、韓国やロシアの国家予算に匹敵し、その所得は米国民の平均的な所得（中央値）の 140 万人分に相当する^⑤。米国では、かくも野放図な経済格差が進行してきた（右図の緑線^①）。

当たりまえだが、富者が富めば、貧者は貧する。かつて相応の収入を得て米国の安定した中間層を形成していた産業労働者たちは、1980 年以降、ずっと没落し続けた。所得額で底辺の 50% を占める人たちのサラリーはここ 50 年間（！）、まったく上がらなかった（右図の赤線^①）。この間に米国の GDP は 5 倍になり^③物価も 8 倍になった^⑤というのに。

社会的な疎外も進んだ。かつては労働組合に参加し、仲間と団結し賃金待遇を守ってきたが、今や、組合そのものが衰退してしまった（注^③）。1950 年には労働者の 30% が組合に属していたが、2017 年には 10% に落ち込んでいる。昔は企業の清掃員でも大会社の社員だという誇りもあったが、今では清掃は外部委託になってしまった。

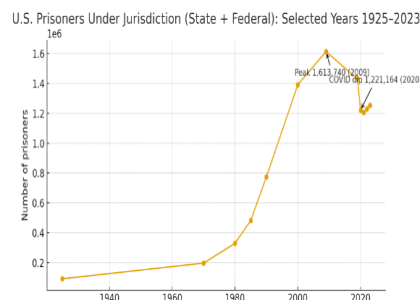


トップ1%の増収は、底辺50%から奪ったもの
中間の49%は、この間、富を失っていない^①

ロビンフッドの逆だ、貧乏人から奪い
金持ちに与える^②

会社の「休日のパーティーに呼ばれなくなった」^②

犯罪も増えて、米国の刑務所に収監されている囚人は 1970 年には 20 万人ほどだったが 1980 年を過ぎると爆発的に増えて 2000 年には 140 万人に達している（右図）^③。増えすぎて、今や半分の州で刑務所は民営だという。人口当たりで言えば、米国の収監者はカナダやフランスの 6 倍、日本の収監者（4 万人）の 15 倍以上である。



普通の白人労働者の没落と疎外

没落の主要な階層は、米国の労働人口の約 4 割を占める普通の白人労働者である。彼らは高校を卒業して働き始めた人たちである。米国は学歴社会であり、もともと米国では高卒以下と大学卒では人生に大きな違いがあった。そして、その格差がますます大きくなっている（右表）。成人の 10%を占める中学卒あるいは高校中退の人たちの所得は、高卒のさらに半分である。

米国の大学卒と高卒の比較 ②③

学歴		
大学卒：高校卒 ^{*1}		
資産	1970年	2：1
	2024年	5：1
所得	1970年	1.4：1
	2020年	1.8：1
失業率		1：1.5 - 2.0
死亡率 ^{*2}	1990年	1：1.5
	2015年	1：5

（数字は概数）

* 1: 米国の労働者数は1億7100万人、その38%は高卒以下の白人労働者

* 2: 非ヒスパニック白人男性

世界のどこでも寿命が延び死亡率が下がっているのに、米国の非ヒスパニック白人男性の死亡率はこの間、2-3 倍上昇している^②。自殺、薬物（麻薬）中毒、アルコール性肝炎、など「絶望死」が増加している。貧困白人の多いルイジアナ州の男性の平均寿命は 76 才、豊かなコネチカット州の平均寿命(81 才)よりも 5 年も短い^{③(注4)}。

1980 年には 40 才の高卒者の 8 割は家庭（結婚している）を持っていたが、2018 年にはそれが 5 割近くまで減少している^②。離婚も多い。

黒人はこの間、所得も財産も学歴も寿命も向上している。下層の白人は「それでも黒人よりはまし」と言えなくなった^②。中南米からの移民（ヒスパニック系白人）も、所得、財産、学歴、寿命が向上している。

貧困者の多い州がトランプを押し上げた

2024 年の米国の大統領選挙では、共和党のトランプが民主党のハリスに大差をつけて勝利した。誰がトランプを押し上げたのだろうか。

それは右の図を見れば、はっきりとわかる^⑤。黒線で囲んだ州（とハワイ）は民主党ハリスが勝利した州である。個人年所得の多い青い州ではほとんどハリスが勝っている。

逆に、トランプが勝利した州は、低所得者の多い茶色の州だった。トランプ勝利のルイジアナ州（LA）の個人年所得（\$46,500）は、ハリス勝利のマサチューセット州（MA）（\$79,900）の 60%以下である。1980 年以降の 50 年間、所得がほとんど増えなかった底辺 50%の人たちがトランプを強く支持したと言ってもいいだろう。

大卒者が多い州ではハリスが勝った

米国は、学歴にも州ごとに大きな格差がある。ルイジアナ州の大学卒業者は成人の 30%以下で、マサチューセット州（62%）の半分以下である。ハリスが勝利した州は、右図で大学卒の多い緑の州とほぼ重なっている。トランプが勝ったのは学士号を持たない高卒以下の学歴の人が多い薄緑の州である。

低所得：学歴は高卒以下：トランプ支持

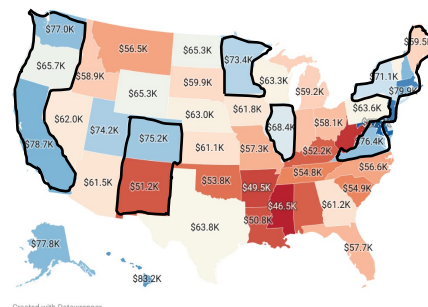
上の 2 つの図を見ると、低所得者の多い州、学歴が高卒以下の人々が多い州、トランプ勝利の州、がほぼ完全に重なっている。例外は、米国 50 州のうち、ユタ州（高所得、学士多い、それでもトラン

2024 年 大統領選挙

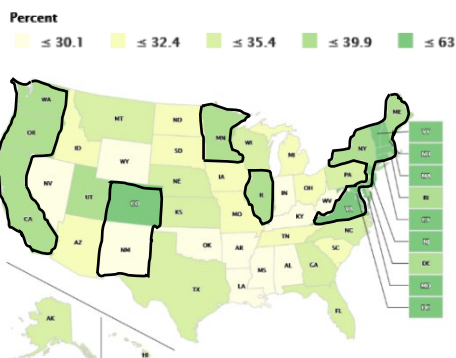
黒枠の州：ハリスが勝利
他の州：トランプが勝利

1 人当たりの年所得（2023 年）

（青い州ほど高額所得）



大学卒以上の学歴の人の割合（25 才以上）



ブ勝利：州民の半分がモルモン教徒で保守的宗教的な価値観が強い）とニューメキシコ州（低所得、学士少ない、それでもハリス勝利：メキシコからの移民が多くトランプの移民排撃の姿勢が嫌われた）の2州だけである。

なぜ、格差の被害者が格差の頂点のトランプを支持するのだろうか？

これがわからない。民主党に対する失望はその大きな原因とはいえ、どうしてトランプのような破天荒な人物が圧倒的な支持を得たのか、わからない。

米国の知識人もこれがわからない。そこでホックシールド（カリフォルニア大バークレー校名誉教授の女性社会学者）は共和党トランプの最強の牙城の一つ、ルイジアナ州へ通いつめ、たくさんの中下層の白人に丁寧なインタビューを行なって「壁の向こうの住人たち」という本で報告した。

ルイジアナ州では石油関連工場からの汚染物質の排出や続発する大事故で環境が汚染され、住むのにも危険な地域がある。ガン患者が多発し「ガン回廊」と呼ばれている所さえある。

にもかかわらず、州民は石油関連企業への規制に反対し、共和党の企業への減税や補助金など手厚い企業保護策を支持している。

資本家は大切だ、資本家がいなければ
誰が俺たちを雇ってくれるのだ

ルイジアナ州は全米でも最貧の州の一つ、保育士の42%、ファーストフード店員の52%など多くの生活給以下の低賃金の労働者が福祉給付を受けている。

にもかかわらず、中下層の白人たちは「怠け者が税金も払っていない連中が福祉によって税金を使っているのはがまんならない」と考える。

メディケアは不十分ながら高齢者などの医療費の援助をおこなう制度である。彼らもその恩恵を受けている。

にもかかわらず、彼らはその縮小をはかるトランプを支持する。ホックシールドが、「実際にあなたもこの制度を使っているでは」と問うても、彼らは「制度があるのだから使わない手はない」と言って、福祉反対の態度は変わらない。

トランプは、不法移民が米国で犯罪をおかしている、と攻撃する。しかし、実際は移民の犯罪率は、米国市民よりもずっと低い（右図^⑤）。

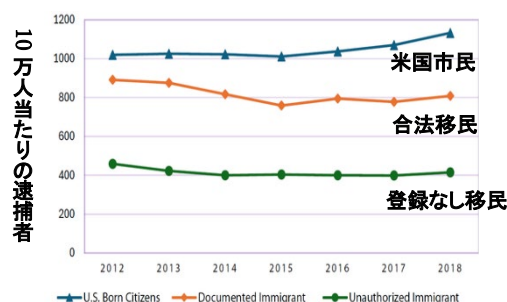
にもかかわらず、彼らはトランプのプロパガンダを信じて移民追放に拍手を送る。また、移民あるいはその子のうちの成功者が自分よりも高い地位について自分たちを支配するようになったと感じていらだっている。その成功者の最たるものが、オバマやハリスである。彼らは「オバマはボルシェビッキだ」などとでたらめを信じる。

ホックシールドもなぜ彼らがトランプを熱心に支持するのか、合理的な説明ができなかったようだ。そして、ここでは多くの人々が「deep story」を持っていると考えた。deep story とは「そのように感じられる」物語であり、事実に基づいた論理的な根拠を必要としない。事実による検証を受け付けない。それは、この記事の最初に述べた「無知による確信」あるいは「思い込み」であり、無知であることによって守られている信念であり、考え方である。それは偏見というのと少し違う。知（科学）と「無知による確信」との違いは、知はBからCに進化（深化）するが、「無知による確信」にはそれがないということだ。

その「思い込み」は、FOX News（トランプ支持の右翼メディア）や Tea Party（福祉などの事業を行う大

メディケア

障害者、高齢者のための政府の医療保険制度。オバマ大統領による「オバマケア」で質的に改善した。トランプ大統領の「大きくて美しい法案」で縮小される見通し。



バラク・オバマ（父がケニア出身）
カマラ・ハリス（父はジャマイカ出身、母はインド出身）

な政府に反対、環境保護庁は廃止しろ、など主張) などを無条件に信頼し、キリスト教原理派の教会仲間の話などからコピーされた story である。資本主義社会で弱者となった者が、資本主義社会の強者のイデオロギーを身にまとして矜持を保つのだろうか。

ホックシールドは進歩的な知識人だが、インタビューの間に、彼らの言うことに批判や反論をせず、聞くのに徹しようとしている。それに、いくら事実や統計を示して相手と議論しようとしても、まるで受け入れられないからである。実際、ホックシールドが話し合った 60 人の人の中で、話し合ってから deep story を変更した人は一人もいなかったようだ。「無知による確信」はどのようにしたら変更されるのだろうか。ホックシールドと同じく、私にもわからない。

科学（知）が民主主義を支える

—— そして教育が ——

民主主義は構成員が独立した知的市民であるときに良く成立し機能する。繰り返すが、知的とは、ものごとを事実に基づいて論理的に、つまり科学的に考えるということである。

もし、民主主義が、「無知による確信」が主導する多数決となれば、どうなるだろうか。進行中の例を現在の米国に見るわけだが、最悪の例を歴史に見ると、社会的な分断や不満を背景に超国家主義の扇動者たちが現れ、彼らは選挙で選ばれて権力を握ると独裁的権力となり、民主主義は消滅し、最後に大きな犠牲をともなう破局に至ってようやく「確信」は清算された^(注5)。

そのような民主主義の自己破滅的な政治コース

をさけるためには、何が必要だろうか。これは、米国に限らず現代の世界が直面する最大の問題の一つだろう。私には答えはないが、ただ、高等教育の重要性はたしかだろうと思う^(注6)。

トランプの攻撃に次ぐ攻撃にさらされている米国の民主主義の反撃を願う。米国にはその伝統はあるはずだ^(注7)。

注 1.

自然科学だけでなく、社会科学も科学であるし、さらに、日常の観察や出来事について事実をもとに論理的に考えることも「科学」といえる。

ただし、科学による結論の厳密さは状況によりさまざまである。連立方程式に例えれば、(独立の)方程式の数と未知数の数が等しければ厳密な解が求まる。自然科学では未知数になるべく定数となるように実験条件や観察条件を選んで、未知数の数を減らして厳密な解を求める。

社会科学では実験できないし、事実の収集も不完全なことが多いので、未知数の数が方程式の数より多いケースに例えられるだろう。その場合、解は不定となる。しかし、不定と言っても、解の存在する範囲や、解とまらないものを知ることができる。それをさらに個人の価値観や感性や印象で解を絞って結論を導く(それだけ社会科学には個性がでる)。

注 2

何をもって「事実」と「認識」するか、これについてはいろいろ議論がある。ここでは自然科学のマナーを援用するにとどめる。「事実」とは、誰でも(望めば)観察あるいは確認できる、そういう出来事あるいは事象である。たくさんの事実の中からどれを認識するか、難しいが、結論に好都合な事実だけ選び出し、不都合に感じる事実を無視するのは、ご法度である。

注 3

1981 年、米国の航空管制官の労働組合 1 万 1 千人は勤務

方程式が2つ、未知数が2つ

$$x + y = 2$$

$$x - y = 0$$

解: $x = 1, y = 1$

方程式が1つ、未知数が2つ

$$x + y = 2$$

解: たくさんある(不定)

ただし、ある2つの数が解かどうかは、代入してすぐわかる

時間の短縮、賃上げなどをかけてストライキに突入した。レーガン大統領はすぐさまストライキ参加者全員を解雇し、また復職も終身禁止した。組合は消滅し、これ以後、どこでも経営者は安心して組合潰しができるようになり、ストライキは激減し組合は衰退した。付け加えると、同じ頃、英国のサッチャー首相も激しく労働組合を抑圧し、1984 年には炭鉱労働者のストライキを潰し、英国の労働組合は衰退した。中曽根首相が国鉄を解体民営化して、日本労働組合総評議会（総評）の中核であった国鉄労組をほぼ消滅させたのもこの頃だった。

注 4

最近、さらに驚くような論文を目にした。

T. R. Holford, *et al*, All-Cause Mortality and Life Expectancy by Birth Cohort Across US States *JAMA Network Open*.

2025;8(4):e257695. doi:10.1001/jamanetworkopen.2025.7695

論文では、2000 年生まれの男性の平均余命を各州ごとに比べている。ニューヨーク、カリフォルニア、ワシントン DC など豊かな州では、87 歳だが、ルイジアナ、ミシシッピ、アラバマ州では 73 歳、実に 14 年も違う。これが同じ国だろうか。これらの南部諸州では、2000 年生まれの女性の平均余命（76 歳前後）が 1900 年生まれの女性の寿命（75 歳前後）とほぼ同じである。100 年たっても進歩がない！

注 5

当時もっとも民主的と言われたワイマール憲法の下での選挙で、多数のドイツ国民はナチスの教義の「思い込み」によってヒットラーを政府首班に選び、まもなくドイツから民主主義は消滅した。そのドイツ国民の「思い込み」は、国民 700 万人（ヨーロッパ数千万人）が戦死しヒットラーが自殺する最後の破局まで一掃されることはなかった。

戦前の日本では、まがりなりにも選挙で政府が組織される形式があった。しかし、武力侵略によるアジア支配が日本の生きる道だ、という（支配層から吹き込まれたにせよ）国民的な「思い込み」により、庶民は開戦に快哉を叫び戦局が悲惨なものになっても戦争をやめようとは言わなかった。その思い込みの罪の対価は、国民 300 万人アジアの人々 1000 万人超の戦死者である。

強力な情報の規制、反対者の暗殺や弾圧、文化的歴史

的な背景、などがあつたにせよ、現在のロシアも、大口
シア主義という思い込みを持つ庶民の投票によって選
ばれた権力者の暴政が目撃される。

注 6

この記事を書きながら、あらためて、大学の役割の重要
性に気が付いた。昔、私が大学に入って驚いたのは、「数
直線を切断したらその切りくちはどんな数だ」という問
いから数学の講義が始まったことだった。私の受けた高
校の数学の授業（与えられた方程式の解き方の訓練のよ
うなもの）とまるきり違う。つまり、大学では「どうし
てそうなるのか」を根本から考えるのだ。自然科学に限
らず、大学の教育は多かれ少なかれ、課題をめぐる事実
や歴史や法則を調べて考えて表現することを教えてい
ると思う。大学では「無知による確信」が通用するはず
がなく、学生は「知」を学ぶはずだ。もちろん、大学出
のうちに「思い込み」に陥る人も少なからずいるし、
大学に行かなくても「知」の人も多い。ここでは、一般
的な傾向を述べた。

米国では親の所得で大学進学率が決まっている。トッ
プ 10%以上の富裕者を親に持つ子供のおよそ 90%は大
学に進学するが、底辺 20%以下の貧困な親の子供の進学
率は 40%以下である。また、公開されていないが、名門
の大学でも超富裕層は金銭的な寄付によって子を裏口
入学させることができるようだ^①。せめて、多くのヨーロ
ッパ諸国のように大学授業料を無料にするなどの改革
が望まれる。

トランプ政権の面々はいずれも名門大学を卒業して
いる。しかし、トランプ政権は大学を敵視して補助金を
カットするなど激しく攻撃している。また、学生の奨学
金を減らし、奨学ローンの取り立てを厳しくする（1.6 兆
ドルの奨学金債権を民間に売り渡す）こと計画している
（2025. 10. 7, ロイターニュース）。大学卒業者は自分た
ちの反対勢力になると感じて、大学進学を抑えようと
しているように見える。共和党支持者のうち、大学が国に
マイナスの影響を与えている、と考える人は 59%だそう
である^②。バンス副大統領の“attack the university” “The
professors are the enemy”という発言は彼らの間では決して過激なものではない。

トランプ大統領 は ペンシルベニア大学卒業
バンス副大統領 は イェール大学卒業
ケネディ保健福祉長官 は ハーバード大学卒業
いづれの大学も補助金カットの攻撃にさらされている。

注 7

フランクリン・ルーズベルト大統領(民主党、任期 1933-1945)を思い出してみよう。

「私は知っています。国民の 3 分の 1 が貧しい家に住み、貧しいなりをし、貧しい食事をとっていることを」

「富める人をさらに富ますのではなく、貧しき人々を豊かにすることこそ、我々の進歩の基準であります」

(1937 年 1 月 20 日 第 2 期就任演説)

「税引後で年間 2 万 5 千ドル以上の実収は不必要です」(当時の\$25,000 は今の\$400,000 くらい)(1942 年 State of the Union Address)。任期中に、所得税は高度な累進制に、固定資産税は 4 倍に、配当金には二重課税に、などの税制の改革で国家の税収はほぼ 3 倍になった。労働運動を支持し、労働者の所得は大恐慌の時の 4 倍になった。

「人間の 4 つの自由を実現する世界をめざそう。言論の自由、信仰の自由、貧困からの自由、恐怖からの自由、・・・」

1941 年 1 月 6 日一般教書演説

「民主主義はそれ自身のうちに、自らを救いうる要素をもつことを、世界に示すことができた」(1934 年議会にあてた報告)

逆もまた真実なのが恐ろしい(吉田)
「民主主義はそれ自身のうちに、自らを破滅させる要素をもつ」

付記

easy なレッテル貼り「思い込み」と tough な思考「知」、意外な人がこのことを強調しているのを知った。

「レッテル貼りの方が受けたりするんだよね。私は街頭演説をするのが仕事でもあるんだけど、『こうなって、こうなって、こうなって、こうですよ?』という話をすると、どんなに簡単に言っても 10 分ぐらいかかるわけです。だけど、レッテル貼りって 1 秒で済むからね」

「やっぱり相当に関心を持って努力しないとだめなんでしょうね・・・でも普通の人にはね、体力にも気力にも限界はあるわけですよ」

(それでレッテル貼りを信じてしまう人について)「怖い。怖いけど、そういう人たちは変わらないんですよ」

「勇ましいこと、情緒的なこと、非合理だけど勇ましくて情緒的な方に引きずられるんだよね、世論って。それに抗おうと思うと、本当に大変」

石破前首相の発言 2025 年 10 月 11 日、首相公邸でジャーナリスト・鈴木哲夫、東海テレビ柴田美奈とのインタビュー